

暮らしと地域再生プロジェクト事業 並柳団地プロジェクト

報告資料



特定非営利活動法人中信多文化共生ネットワーク
並柳団地プロジェクトチーム



山丹丹助成

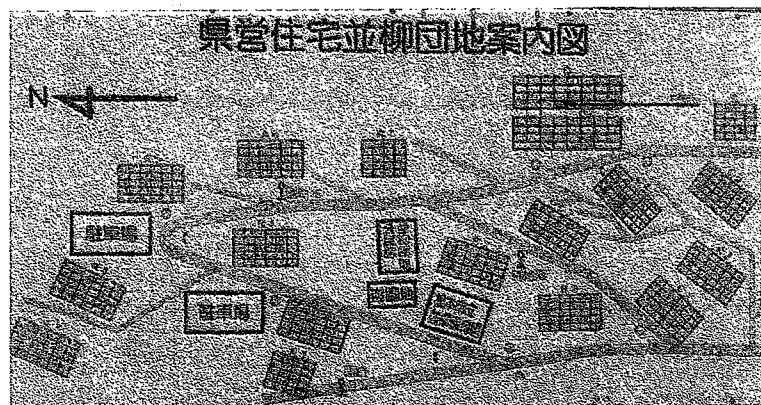
独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

目次

1. 並柳団地とは
2. 町会からのSOS
3. 多分野・多機関の共同プロジェクト
『並柳団地プロジェクト』の始まりと理念
4. 医療福祉機構助成事業『暮らしと地域再生プロジェクト事業』として
5. 活動報告と発掘
6. 課題と成果
7. 来年度の取り組みに向けて

1. 並柳団地とは

- 総戸数
581戸
- 在住世帯数
380前後



2. 町会からのSOS

- 母子・外国人の集住
- 高齢化
- めだつ傷病者・障がい者
- 数年連続して発生する自殺
- 長時間or夜勤→こどもの孤独



民生委員・町会など
地域活動と担い手の
疲弊

今でも救急車はしょっちゅうくるが、本当にあそこはどうしようかという感じだった。「スラム街のよう」と言われたことがあり、ショックだった。どうしようもなかったというのが当時の状況だった。

並柳団地町会長

地域の人々の努力に、どう援助できるか？
が、地域の人々も、いろいろな団体や制度を知らない。それを知ってもらうところがスタートだったと思う。

反貧困セーフティネット・アルプス

3. 多分野・多機関の共同プロジェクト 『並柳団地プロジェクト』の始まりと理念

分野別の社会資源（支援団体・支援機関）の集中投下

地域（地縁組織）と支援（志縁組織）の連携

↓

地域の支援力・包摂力を上げる
資源を残して撤収

★潜在的な困難と支援ニーズの発見 ➡ 早期発見・早期支援

★地域支援者と機関支援者の連携 ➡ 地域支援者の負担軽減
と支援力強化

↓

安心で元気な地域づくりへ

並柳団地を超えて期待する試み

- 社会的排除リスクの地域における可視化と全市的課題化
- 官民の社会資源の脱中心的なネットワークの強化
- 他地区・他町会等の類似状況に対する官民協働の支援スキームの先遣事例の構築

これらの過程を、「健康寿命延伸都市」を実現する「地域包括ケアシステム」、「多文化共生推進プラン」、「生活困窮者自立支援体制松本モデル」等、市の施策と連動して行うことで、市の支援施策全体の充実を図る。もって社会的包容力の高い地域づくりを期し、社会的排除に対し抵抗力のある社会的包摂を推進することを目指す

4. 医療福祉機構助成事業 『暮らしと地域再生プロジェクト事業』として 事業の取り組みを以下に整理仕分け



独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

1. 相談会の実施
2. 全戸訪問の実施
3. 支援フォローアップ
4. 社会資源ガイドの製作
5. 連絡会の実施

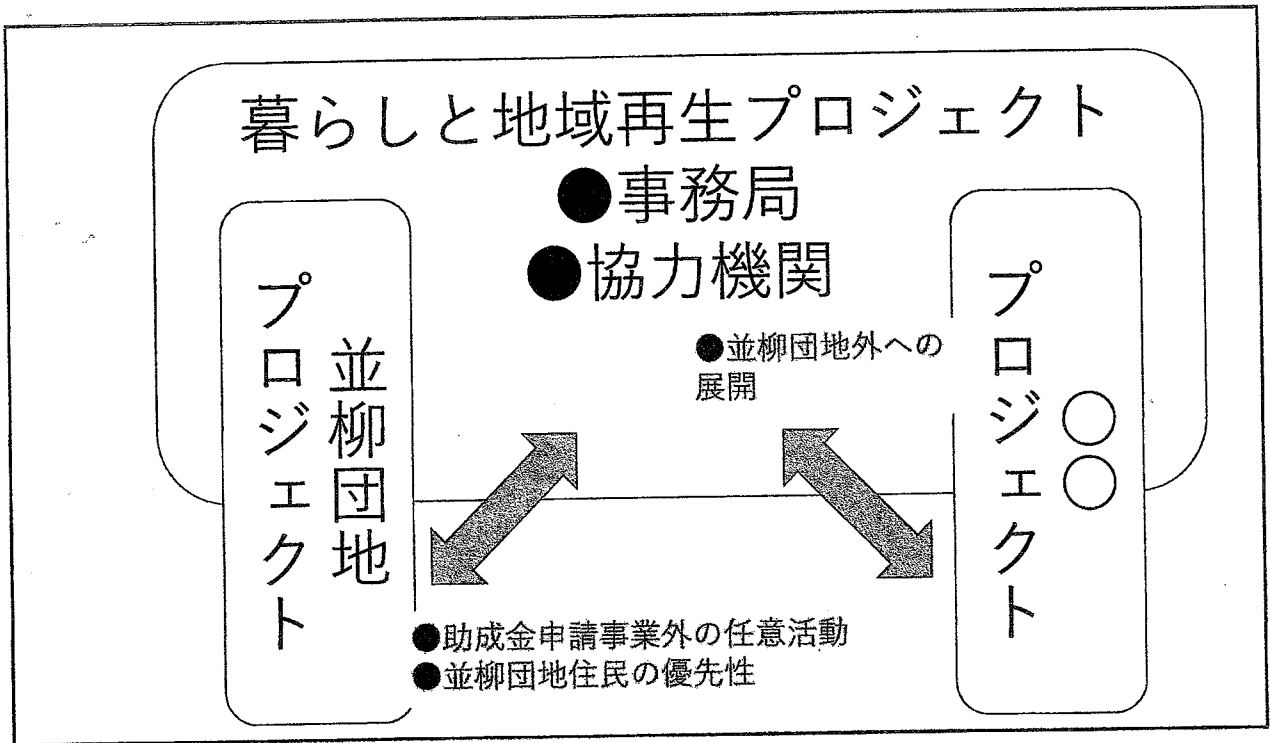
助成額；2,662,000円

事業主（助成金受け皿）として

【特定非営利活動法人中信多文化共生ネットワーク】

「1. 相談会」「2. 訪問」は本プロジェクト立ち上げ時からの
 想定プログラムであり、
 この遂行にあたり「3. フォローアップ」は必然であり、
 「4. ガイド編集」は初回相談会における反省から発見された。
 これらのプログラムを遂行する上での団体・機関間の協議の場として「5. 連絡会」は位置づけられるが、同時にこの繰り返しが当地での多機関ネットワークを増強するとともに、地域に対する支援機関の紹介にもつながることが期待される。

時期	事業実施内容
平成28年 4月	●第1回相談会の開催
5月	●第1回連絡会の開催 ●学生スタッフの研修
6月	●第2回連絡会の開催
7月	●第3回連絡会の開催
8月	●第4回連絡会の開催
9月	●第5回連絡会の開催 ●学生スタッフの研修
10月	●第6回連絡会の開催
11月	●第2回相談会の開催
12月	●第7回連絡会の開催
平成29年 1月	
2月	●第8回連絡会の開催
3月	



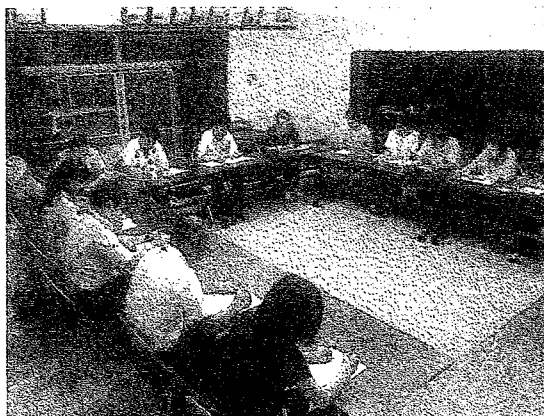
参加・協力機関

健康づくり課・中央保健センター	中央公民館
障害福祉課	庄内地域づくりセンター
市民相談課	人権男女共生課
地域づくり課	南西部包括支援センター
生活就労支援センターまいさぼ松本	多文化共生プラザ
ユニオンサポートセンター	はぐるっぼ
並柳団地町会	(一社) よりそい福祉バンク松本
(N) フードバンク信州	(N) 中信多文化共生ネットワーク
(N) ユニオンサポートセンター	(N) てくてく
反貧困セーフティネット・アルプス	ふりまネット信州
企業組合労協ながの	生存を支える会【仮】
●協力	
松本協立病院	松本大学

5. 活動報告と発掘

実施日	プログラム・経過
11/20	町会長への聞き取り
12/16	第一回プロジェクト会議
4/24	暮らし応援DAY
8/19	支援機関・地域キーパーソン情報交流会
10/2	第一次全戸訪問の開始
11/9	第二次訪問の開始
11/11	秋の暮らし応援DAY

(1) 連絡会



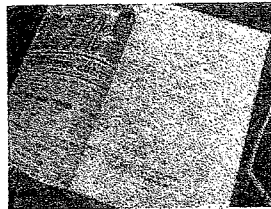
- ◎初動11/20から1ヶ月内に初回開催
- ◎以後おおむね月1回の開催
- ◎7~20機関の参加
- ◎分会の組織と各単独実施

- ・団地の近況・課題
- ・訪問や相談会の打ち合わせ
- ・事例報告
- ・新規参加機関自己紹介
など

生活困窮者事業については、縦割りであるべきではない。町内の連携、支援団体の連携、行政との連携。さらに進めていく必要がある。プロジェクトへの参加は意義がある。顔が見える！ 相談会、全戸訪問など、行政ではここまでいろいろな団体を巻き込んですることは難しい。これからの改善点もある。今後とも、市として参加して行きたい。

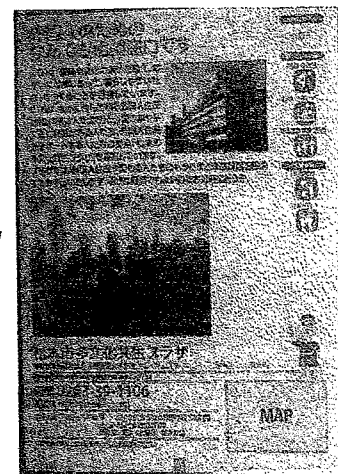
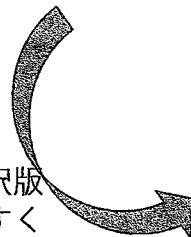
市民相談課

(2) ガイドブックの編集



『支援機関・地域キーパーソン
情報交流会』用のレジュメ

- 手に取りやすい装丁
- いざ困った時に読みやすい
やさしい日本語と5カ国語翻訳版
- どんな支援ができるか分かりやすく
アイコン化
- 実用時のアクセスを意識した地図・
アクセス・ビジュアル
- A5カラー22ページ（予定）



(3) 相談会



▲ 深刻な相談を寄せる相談会とサロンの狭間を行く相談会場レイアウト。別に個室を用意

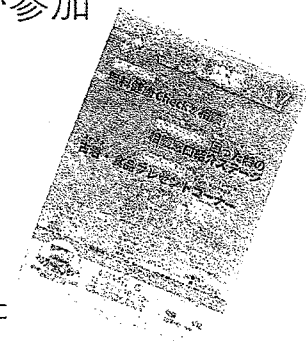
暮らし応援DAY

(4月24日)

来場35世帯+町会ボランティア11名=住民46世帯が参加



インフォメーションコーナーに



(3) 相談会

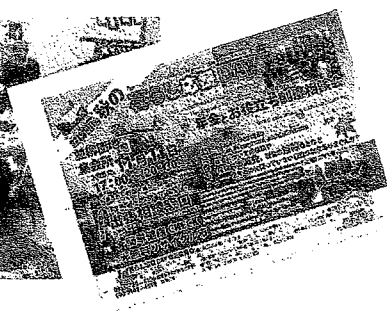


▲市の「出前講座」を用いた税金の説明会と相談ブース

秋の暮らし応援DAY

(11月11日)

来場21世帯+町会ボランティア5名=住民32名が参加



時間帯・曜日を変えると、来てくれる層が変わる。どちらの相談会も意義があった

まいさほ松本

	実施時間帯	期待参加者層	来場者
1回目	日曜午後	全般	高齢者・障がい者
2回目	平日夜間	現役層	やや現役労働者層

サロンや日本語ひろばなどに普段来ている層とは、全然、違った。特に、2回目には町会長でさえ、名前と顔が一致しない人がいた。参加人数は減少したが、普段のお祭りや町会のイベントに顔を出さないひとが来てくれて少しびっくりした。

並柳団地町会

●力を失い、来てほしい人ほど来れない現状がある。そのように深刻化する前に来てほしいが、すぐには相談につながらなくても、「そういうところがある」と知ってもらうだけでも意味がある。全員にぴったりの相談会はない。いろいろなアプローチをしていくことが必要。

まいさほ松本

●母親の苦境を一番把握しているのは学校。給食費滞納など…。先生は知っている。でも、先生はどうにもできない。そこがつながるといいのだが…

よりそい福祉バンク

★支援物資の提供と健康チェック



衣料品



食料品

洋服が必要な世代 = 子育て世代・・・だが、そういう人があまりこなかった。だから、本当には「届いていない」と思った。母子家庭は、学年の変わり目は大変。制服は鞆など・・・。そういう人たちに直接届くようにするために何ができるかが課題。

よりそい福祉バンク



健康診断

病院としては、こういうところに出かけていくことは大切と考えている。1回目が大きかった。自分たちにもできることがたくさんあるということがわかった。非常によかった。

2回目は少なかったが、そこにいる、こういう活動をする事事で安心感を示すことが大事

松本協立病院

1回目、2回目、来る人が異なった。両方とも「話をしたい人」が多かった。孤独な人、話をしたい人が多い。現役世帯の来所を志した2回目・・・元気な人は、健康管理に目がいけないですね、なかなか。

中央保健センター

「病院来るの？」と食いついてきた人が多かった。看護師などが来てくれたということで感動していた人もいた。普段一人でテレビを見ているような人が出てきて、話をしたがった。あそこにあんなに人が集まるとは思いませんでした。

「服」を探しに来て人もおり、結構、遠くまで自転車で仕事に通っている。そういう人が、服を持って行ってくれた。よかった。

並柳団地町会

(4) 全戸訪問

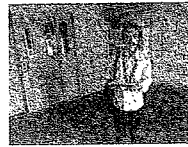


◎全581戸を、のべ15チーム（2人一組）で訪問



第一次訪問 ■ 土・日・祝日

第二次訪問 ■ 平日



◎空室を除く391戸※と対話を試み
◎計221世帯の住民と対話した

見ず知らずの訪問者に対し、音が響く廊下で深刻な内容の相談には踏み込めない。それでも対面することができたことには価値がある

反貧困セーフティネット・アルプス

問題を抱える本人の中には「何しに来たの?」「うちだけに問題があるって思ってきたのか?」的な反応も。

親族との関係が乏しくこの土地への不慣れな人と会う。この冬が心配。こうした人ほど情報や仲間、愚痴を聞いてもらえる人が必要。

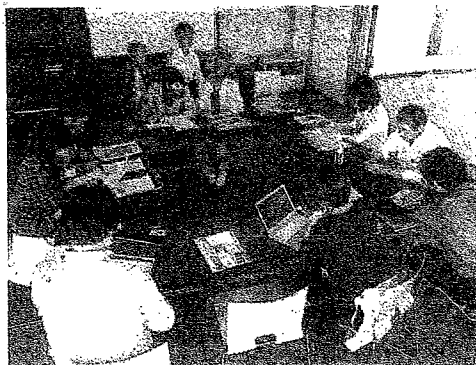
てくてく

支援を要する相手ではなく地域の見守り手や元気作りに参加する「支援者」になれるポテンシャルを持った人を何件か見いだした。

「困っている人」のみならず元気な人をフォローする事も重要と思う

中信多文化共生ネットワーク

(5) フォローアップと 発掘された困難



▲先行訪問後の記録とケース検討

- 相談ケース数（概数）；27件
- 所見戸数；80戸
- のべ相談票枚数；46枚
- 要追加アプローチ；25戸
- PJ直接継続支援中；4件

①個々の住民（ミクロ・スケール）

困難分類

主な困難の分野（重複あり）			
健康 <small>（病気・障がい・介護など）</small>	30	言語 <small>（日本語が分からない等）</small>	10
住環境 <small>（インフラ・交通など）</small>	11	経済困窮 <small>（生活保護含む）</small>	10
近隣関係 <small>（人間関係など）</small>	14	家庭	11

①個々の住民（ミクロ・スケール）

▲**身体機能→移動の困難→ひきこもり傾向**
 （高齢による衰え・病気・障がい）

▲**精神障がい→外部刺激へのストレス**
 →**攻撃性・過剰な不信感→孤立・トラブル**

★**発見①**多くの場合、すでに公的支援機関から捕捉されている

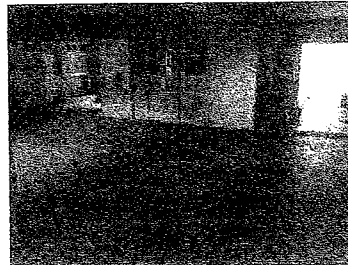
★**発見②**公的支援機関や給付制度につながっていても、上記のような問題が保存されている

②団地の環境（メゾ・スケール；ハード）

▲**買い物・入浴など**
日常移動の困難
 （特に自動車を持たない高齢者・障がい者・困窮者が深刻）



▲**照明・衛生による**
心理的影響
 （昼間に暗い高層ピロティー）



②団地の環境（メゾ・スケール；ソフト）

▲他の住民との軋轢

- 外国住民・精神（～パーソナリティ）障がい者との接し方
- 戸間近接&騒音と活気とのジレンマ
- 時に、神経症～境界例～統合失調症の
見立てられる住民に顕著な「騒音」への「被害感」

▲地域活動参加者層の固定

③地方の地域と 団地構造の環境（エクソ・スケール）

- ▲県・住宅供給公社の不透明な運営計画
- ▲ニーズと合理性に柔軟ではない運用
- ▲優先入居枠の存在とケアの不在
- ▲回遊性に乏しい都市形成と公共交通機関の劣化

④問題構造の環境（マクロ・スケール）

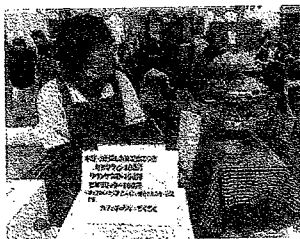
- ▲マイホーム中心主義の日本の住宅政策
- ▲雇用形態の変化→世帯の変化→団地の変容
- ▲公的ケア資源の不自由・人員予算不足

6. 課題と成果①課題

- (1) 事業運営に予想以上のマンパワーを要する
- (2) 初見でのコア相談への不到達
 - ・全戸別訪問のコストパフォーマンス
 - ・相談に至るまでのフォローアップの必要性
- (3) 要支援者の拒絶へのアプローチという問題
 - 初回相談からリファーまでの間に
 - 予想以上の回数でラポール形成のアプローチを要する
- (4) 地域住民への期待と負担増のジレンマ

6. 課題と成果②成果

- (1) 2015年に引き続き2016年、団地での**自殺0**達成
- (2) ツール・フォーマットの開発が大きく進展
- (3) 全戸別訪問時の想定以上の対応率（初回40%）
- (4) 地域キーパーソン・ボランティアの積極的協力
- (5) 各機関の別事業と地域の独自コラボの実現



住民交流祭

なみカフェのスタート



- 準備段階で地域の人と良好な関係があったことが幸い
- 来やすい場所と声かけを地域が担っていき誰でも受け容れる姿勢が、地域のこどもと大人たちが顔の見える関係を育んでいる
- 語れる場、語れる相手が必要
ワーカーズコープ

6. 課題と成果③その他



中央公民館横山 今まで知らなかったかたとつながりができたことは、成果だったといえる。

青木町会長 だいぶ変わってきたと思う。

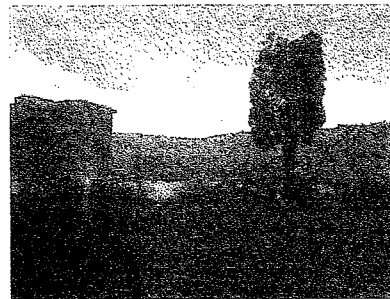
横山 並カフェが始まってしばらくして大人と子供があいさつをするようになったと聞きました。そのことをはじめとして、人と人のつながりが少しでき始めている。

青木 子供たちは、大人を見て逃げる子もいた。カフェに来る子は、(町会長を見て)「お〜っかいちょー!」と言ってくれる。会話をする。子供たちの親にも、ちょいちょい会うなど、交流ができるようになってきている。

横山 成果が見えるかたちであらわれてきている。まだ、見えない人たちもいる。先は長い。

いろいろな問題が絡み合って自殺に至る。その要因を変え、支援する体制が必要。経済、病気・・・など、きっかけのところから、自殺まで追い込まれないような支援が必要。

健康づくり課



初めての経験。恵まれた機会だった。できることはしていきたい。どこまでできるかはわからないが…ていうかこのプロジェクト、何を以て目標達成とし、どのように完結させていくということになるのでしょうか？

何をもってゴールとするか、より意識的に考えるべき時でしょうか……

労協ながの

来年度事業の構想

課題	事業分類	事業の取り組み
地域の力の底上げと負担軽減	2018年度「暮らしと地域再生プロジェクト事業」としてWAM	並柳団地Pの相談フォローアップ・並柳団地地域キーパーソンのエンパワメント
訪問による潜在困難発掘の効率化		地域キーパーソンの訪問への同行・メンタリング
潜在的困難の早期発見早期支援	助成に応募した申請事業	重点地域における全市を対象とした相談会の実施
アウトリーチ支援の未開発		ガイド冊子の充実と他ツールの開発
ネットワークの強化拡大	状況に応じた流動的な取り組み	連絡会の継続
風通しの悪い住宅管理運営		県・市・住宅管理者と住民自治の対話促進
システム化・制度化		県・市への政策提言
その他未知の課題		その他、支援の進展に伴い要する取り組み

町会からのSOSを受け、さまざまな分野の支援機関が連携して「できることを探そう」と始めた『並柳団地プロジェクト』。団地現場での相談会『暮らし応援DAY』と全戸を対象とした訪問を繰り返し、発見された困難を早期に相談へとつむぎ直して専門機関や専用窓口につないでいく取り組みです。

その過程で、より幅広く各地域での展開を視野に入れた『暮らしと地域再生プロジェクト事業』が始まりました。人も地域も、弱ったときにSOSの声をあげられるように、そしてこのSOSに回答できる「私たち」であるために、今後とも皆様の御協力をお願い申し上げます。

事務局 八木わたる

